「子どもをめぐる現状と課題」

石 川 洋 子

1. 現代の子どもの状況

今日本では、子どもに関わるさまざまな問題が多発している。子どもをめぐっての大きな事件がマスコミをにぎわせたり、幼児・児童虐待の増加、学級崩壊等、親の子育てに対する疑問も大きくなっている。

一方、発達心理学の研究分野では、近年、特に認知に関する発展がめざましい。乳児期初期の五感覚や認知の発達、学習に関するもの等、実験的手法を用いての成果が数多い。乳児期のごく小さい時から子どもは、周囲を認識し、学習し、周囲の人とコミュニケーションを取ろうとしている存在であることがわかってきた。最近、笑わない赤ちゃんや抱っこを好まない赤ちゃんの問題が取り上げられることがあるが、周囲の人との接触不足やコミュニケーション不足からくるものと思われる。最新の発達心理学の知見からは、乳児の持つさまざまな能力を引き出すような、相互作用的やり取りの重要性が指摘されている。

一方、目を世界へ転じると、いまだに飢えや感染症に苦しみ、満足に教育も受けられない子どもたちがいる。ユニセフの「1999年世界子供白書」によると、世界の人口の6分の1に当たる推定8億5500万人が非識字の状態にあり、また開発途上国では、1億3000万人以上の子どもが基礎教育を受けられず、その3分の2が女の子であるという。1997年、オスロで開かれた児童労働国際会議では、開発途上国において推定2億5000万人の子どもが労働を強いられており、その多くが学校教育を受けていないことが報告されている。

1990年にタイのジェムティエンで開かれた「万人のための教育世界会議」で、質の高い基礎教育を世界全体で実施することを決めた。そしてこの会議で、教育が貧困を克服し、死亡率を下げ、また人口増加を抑制し、女性の人権を守り、環境保護につながるというコンセサスを得たと言われる。やはり1990年に発効、国際法となった「子どもの権利条約」においても、子どもにとって最善の利益となることをすべきことや教育を受ける権利等が大きく謳われている。子どもへの基礎教育や幼児教育の重要性が、世界レベルでようやく共通認識されるようになってきた。

子どもをめぐる世界の状況を見ると、発達心理学の研究の目覚ましい進歩をもとに、よりよい子育てと教育を目指すことと同時に、人権の保護や基礎教育のレベルをどう引き上げるかということとが併存している現状と言えよう。

しかしまた、同じユニセフの「世界子供白書」で日本のことが取り上げられているが、そこでは、「日本の子どもは幼稚園の時から、よりよい社会的地位を求めての果てしのない競争の中で成長する」と指摘されている。日本では、幼稚園か保育所等何らかの幼児教育を受けている5歳児が9割を越えており、就園率でみる限り、日本の教育はトップレベルとなっている。ユニセフの指摘が日本の幼児の全体像を表すものとは言いがたいであろうが、これは、教育の先進国である我々に、教育とは何か、子どもを育てるとは何か、子どもにとって最善の利益とは何かを再考することを求めていよう。我々はそれに答えなければならない。

2. 少子社会と子ども

「世界人口白書」によると、1999年の世界人口は60億人に達しており、毎年7800万人ずつ増加しているという。1969年以来、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの諸国でヘルスケアや教育が向上し、子どもの数は少ない方がいいと考えられるようになり、人口増加の速度は抑えられてはいるが、最貧国の国々、特にサハラ以南のアフリカと南アジア、西アジアの一部では依然高い出生率であり、人口増加の速度も最も速い。

一方同時に、世界61の国では低い出生率であり、長期的には人口減少に転じることもあり得るため、出生率を上げる政策の見直しが必要とされている。日本でも少子化が予想以上に進んでいる。1997年の合計特殊出生率は、1.39と低い値のまま推移している。この少子化の現象は、高齢化社会の到来とセットにされ、社会経済的な観点から論じられることが多いが、子どもたち自身への影響が大きいことは忘れられがちである。

日本の子どもの問題を、少子化に焦点を当てて考えてみたい。親が子どもを暖かく育てたり、教育機関で教育することは重要ではあるが、これだけが大きな割合を占めるわけではない。子どもは周囲の人々との関わりや模倣の中で、見よう見まねで学び、考え、育っていく。子どもにとっての最大の模倣の対象は、子どもである。少子化で周囲に子どもが少ないということは、モデルが少ないということであり、行動のし方を学んだり、さまざまなタイプの人間を知ることも少なくなるということである。

外で遊ばなくなっていることや、近隣との人間関係の希薄化もこれに拍車をかけている。また、友人と関わることの楽しさを知ったり、子どもの世界を共有できる機会も減るので、人間関係のわずらわしさだけを感じるようになってしまい、人間そのものに対する信頼感も得にくくなるであろう。

また、子どもだけで自由に遊ぶことで、エネルギー発散をはかったり、ストレス発散ができることも重要である。自分の周囲に、自分と同じような、或いは自分と全く異なった行動や意志表示をする子どもがいることを知ること等も、子どもにとっては大切な教育環境である。子どもにとっての教育とは、子どもに与えることと同時に、子どもの周囲にいるもの、あるものすべてを含まなければならないであろう。

子どもが関わる大きな事件に驚かされることが多いが、事件を引き起こす個人的な背景と同時に、このような少子社会の持つさまざまなデメリットの中で、親が子どもを育て、子どもたちが育っているという社会的バックグラウンドをもっと知るべきであろう。現代の子どもに関わる問題には、この少子化と人間関係の希薄化が、大きな背景をなしていると思われるのである。

3. 少子化に対する施策

少子化の要因としては従来から、晩婚化による出産年齢の上昇、経済的要因、住環境の問題、共働きの増加等が指摘されている。また子どもを持つことに対する意識の変化や負担感等もあろう。しかし、夫婦の理想子ども数は2.53人であり、20年間ほとんど変化していない点を考えると、子どもを生めないでいる状況が改善されれば、少子化傾向がとどまることが予想される。

少子化の歯止め策は、さまざまに考えられている。1997年の人口問題審議会で少子化に関する報告書が取りまとめられたが、その中で、「少子化の要因への政策的対応は、労働、福祉、保健、医療、社会保険、教育、住宅、税制その他多岐にわたるが、中核となるのは、固定的な男女の役割分業や雇用慣行の是正と、育児と仕事の両立に向けた子育て支援である。」としている。これらの要因や是正策は従来から指摘され

ていることではあるが、社会的施策と同様に、男女の役割分業等に対する意識の変革もなかなか進んでいない。

1994年からは10年間をめどに、エンゼルプランと呼ばれる子育て支援の施策が実施され、子育てと仕事の両立支援、家庭での子育て支援、子育てのための住宅や生活環境の整備、ゆとりある教育の実現と子どもの健全育成、子育て費用の軽減が目指された。1999年度から2004年度までを、新たに「新エンゼルプラン」として、少子化対策が策定されている。

労働省は、1994年から始められた地域住民参加型の事業である、仕事と育児両立支援事業のファミリー・サポートセンターを広げようとしている。また1997年には、児童福祉法の一部を改正する法律が施行され、保護者が保育所を選択できる等の保育制度の見直しがなされた。児童手当等も改善されようとしている。さまざまな面から少子化対策がはかられてはいるが、早急に効果をあげるのはむずかしいようである。

少子化に対する歯止め策と同時に、親へのサポートも重要となっている。少子化で親自身にも、親としてのモデルが少ない時代となっている。親自身が少ないきょうだいの中で育ち、子どもを知らないまま親になり、近隣に子育ての経験者も少ない中で、育児雑誌等のマニュアルに頼りながら、子育てに孤軍奮闘しなければならなくなっている。このため、子育ての援助に向けた子育て支援センターの設置や地域の子育てネットワーク作りへの援助等も、徐々になされるようになってきている。

4. これからの子育て

今後共少子社会が続き、周囲に子どもが少なく、また子育ての経験者が少ない教育環境の中で子育てをせざるを得ないのであれば、乳児期の初期から、子ども同士、或いは親同士が関わりを持てる環境を意図して作っていかなかればならない。

若い親たちへの批判の言葉は、いつの時代にも聞かれるものであるが、もはや子育ては、親が個人単位でしていくものではなくなっているのではないだろうか。子育てをしている母親たちに、うつ病等精神的トラブルを持つ人が増えていることは、このことへの警鐘であろう。現代の子育ては、開かれた社会の中で、援助できる人がそれぞれの場所で援助しあう時代となっている。子育てを共有できる機関や人、集いあえる場所等の整備が早急に求められている。

また、最新の発達心理学の知見を子育てにフィードバックしていくための人材も必要である。幼児教育に携わる人材の重要性もさることながら、乳児期初期からの子どもとの関わり方を伝え、また親の精神面でのケアもできる人材の確保とその場が必要であると思われる。

そして、とにかく今、子どもにとって最善のことは何かを常に振り返り、試行錯誤していく努力が必要であろう。子育てや教育は、結果がすぐには見えない世界である。また親やその周囲の人々、つまり人間そのものも、理屈通りにはいかない存在でもある。結果をすぐに求めようとせず時間をかけて待ったり、理屈通りにいかない相手をお互いに許し合ったり、補い合ったりすることが望まれる。今の子育ての状況を見ていると、我々自身が、何とか互いにもう少し許容的になれないものかと思う。

＜引用文献＞

1.「1999年　世界子供白書」－教育－ユニセフ
2.「1999年　世界人口白書」UNFPA 国連人口基金
3.「平成10年版　厚生白書」厚生省
4.「平成11年版　厚生白書」厚生省